

## 令和4年度第2回滋賀県総合教育会議の結果について

### 1. 会議概要

日 時：令和4年9月2日(金)10:00～12:00

場 所：県庁北新館5-A会議室（一部出席者はオンライン会議システムを活用）

出席者：三日月知事、大杉副知事、福永教育長、土井委員、岡崎委員、窪田委員、  
野村委員、石井委員

ゲスト：野洲市立野洲小学校教諭 角 憲幸

米原市立伊吹山中学校教諭 藤川 直子

説明者(文部科学省)：文部科学省初等中等教育局教育課程課長 常盤木 祐一

議 題(1)次期「滋賀の教育大綱」について

⇒ 次期「滋賀の教育大綱」の策定に向け、その方針について協議を行った。

(2)子どもたちの学ぶ力の育成について

⇒ 「令和の日本型学校教育」に関する文部科学省の説明や、本県のこれまでの取組の概要に関する事務局の説明、現場の取組に関するゲスト発表を踏まえ、子どもたちの学ぶ力の育成の方向性について、意見交換を行った。



### 2. 会議の結果

#### 議題(1)の協議結果等

##### (1) 協議結果

次期「滋賀の教育大綱」については、愛をもってみんなで取り組む教育、学習者を主体に置く、個人と社会全体の幸せ(ウェルビーイング)の実現を志向する等を基本的な方向性とするほか、以下の具体的な観点を方向性とする策定方針について共通理解が得られた。

- (1) 時代の変化にたくましく向き合い、主体的に答えを見出し、未来を自ら切り拓く「夢と生きる力」の育成
- (2) 滋賀ならではの学びの充実
- (3) 教育におけるICTの効果の最大化
- (4) 生徒一人ひとりの好奇心や探究心を育み、更に深められる高等学校づくり
- (5) 特別支援教育をはじめ、多様な個人の置かれた状況へ寄り添い、誰一人取り残さない、地域、福祉部門、経済界、家庭など社会総がかりでの取組の充実
- (6) 子どもたち一人ひとりの可能性が最大限に引き出され、子どもたちや教職員の笑顔があふれる学校現場の実現
- (7) 活力ある地域や家庭と、人生100年時代を豊かなものとする生涯学習の振興

## (2) 主な意見

- ①未来社会や夢を想像し、先を見据えて、今、何を教育しなければならないかを考えることが重要である。(委員)
- ②「教育におけるICTの効果の最大化」にあたっては、何のためにICTを活用するのか、認識の共通化が重要。DXは元々、豊かな人生を送ることが目的と承知している。(委員)
- ③幼児期から児童期にかけて、家庭の愛情を基盤として、自制心や思いやりなどの非認知能力が培われる。地域全体で、いろいろな方が関わりながら、子どもたちの健やかな育ちの環境づくりが図られるよう、家庭や地域での取組を重視したい。(委員)
- ④一人ひとりの個性や多様性を大事にしていくことと、多様な人たちが協働関係を作って目標を実現していくことは両輪であり、子どもたちの学びの他、先生方の働き方も含めて、全体として取り組んでいく必要がある。(委員)
- ⑤読み解く力の育成は今後も重要だが、同時に、自分自身で学習目標を立て、何をすればいいか考えて学んでいく基本の部分を、小学校の段階から身に付けていく必要がある。(委員)
- ⑥児童生徒等の多様な個々のニーズに合わせた学び方を用意することが重要である。一方で、いろいろなニーズのある者たちが学校に集い、協働の必要性を学ぶことも重要である。(委員)
- ⑦幼保小の接点は、子どもの主体性と教員の意図性をバランスよく掛け合わせた学びを考えるために、非常に良い場である。負担を増やさずに、県内全域で考える機会があると良い。(副知事)

- ⑧「愛」をもって、滋賀の教育を作っていくことを、次期教育大綱で表現したい。高等学校段階の学びに、開設予定の高等専門学校も含め、前向きに「それぞれの夢を実現する」ように捉えていく。また、先生方の学び、能力向上を応援するような取組も盛り込みたい。(知事)

## 議題(2)における主な意見等

### (1) 読み解く力の育成の実践に対する意見

- ①問題が生じた時に、他者と相談して解決しながら、自分から取り組むことが、社会で生きる力を高める学び方として非常に重要であり、ある程度早い段階から指導して、子どもたちが身に付けていくことが望ましい。(委員)
- ②子どもたち自身の気づきが、定着に繋がる。また、自分の意見を持たせることが大事である。そのためにも教員は子どもの自発性を待つことを意識し、子どもたちが目的意識や、学びの意義を受け止め、自ら考えるようにすることが重要である。(教育長、ゲスト)
- ③子どもたちが安心して発言、発信や発表ができるように、スモールステップで取り組むことが重要である。また、表現力と併せて、人の意見をしっかり聞く学習環境が大切である。(教育長、委員)
- ④校内部会を設置して教科を越えた交流を図り、読み解く力の育成に向けた授業の再構築を校内全体の共通理解とすることができた。また、他教科のICT機器の活用事例の共有は、再構築の共通理解に効果的だった。(ゲスト)
- ⑤共通するテーマに関する市域の研究部会や、校種間連携の機会などは、学校を越えた取組の普及のプラットフォームとして有効である。(ゲスト)

### (2) 今後の取組の方向性に関する意見

- ①ICTを活用して、子どもたちが自身の学びの状況に応じて、基礎的な内容を含めて反復練習できる環境が効果的である。(教育長、委員)
- ②子どもたちが生き生きと学ぶ授業づくりは、全ての教員の願いである。そのための教材研究や授業づくりに、時間をかけることができる働き方改革が重要である。(委員)
- ③学校現場での授業づくりの試行錯誤が、教育の質を支えている。教員の間で、もっと共有すべきである。(副知事)
- ④「読み解く力」の育成に当たり、子どもの基礎基本に向き合おうとする意欲を高めることが重要である。また、「学ぶ力」や「読み解く力」の育成のねらいを、学校外

で学習支援を担う主体と共有することも重要。(副知事)

- ⑤学校や家庭等の子どもを取り巻く環境をより良くし、子どもがしっかりと学びに向かえるようにするために、課題を整理し、学校内外で連携することが重要である。(知事)